

青春スクロール

母校群像記

saitama@asahi.com

知見を広げ、政治や行政の道で活躍

熊谷女子高校（以下、熊女）の卒業生には、知見を広げ、政治や行政の道に進んだ人たちがいる。

元滋賀県知事で参院議員の嘉田由紀子（71、1969年卒）は生徒会長を務めた。制服のボタンの直径やベルトの材質まで細かく指定されている校則に異を唱え、立ち上がった。中学時代も生徒会長を目指したが、「女は副会長」と言われて断念していた。女子校である熊女では「女だから」は理由にはならない。「のびのびと過ごせた時期」と振り返る。

アフリカや農業への関心から、探検部がある京大農学部へ。本庄市の実家の農家で育てていたスイ



2013年に出版した自伝を手にする嘉田。環境社会学者としても知られる



県立熊谷女子高校2

カやゴマの原産地がアフリカとされることを知り、世界の広さに心が躍った。環境にも向き合い、研究対象だった琵琶湖のある滋賀に居着いた。

嘉田の姉で元本庄市議の明堂純子（75、65年卒）は熊女時代、「ノンポリ」だった。休日は電車に乗って東京・有楽町方面へ友達とよく遊びにいった。銀座の画廊にふらっと立ち寄ったり、女性服を販売する「三愛」をぶらついた。京への憧れは強かった。

子育てが一段落して「第二の人生」を考えたとき、「政治の世界に女性の声が反映されていない怒りがあった」。父が本庄市議だっ



中学生の時、父とともに選挙カーに乗った経験が自身の選挙でも生きたという明堂

たこともあり、政治とのつながりは自然にあった。

県議の江原久美子（51、89年卒）は、入学直後に「熊女、すごい」と驚いたことがある。教室で隣の席に座る級友が窓の外をぼんやりと眺めていると思ったら、俳句を詠みだした。「こんな子もいるんだ。世界は広い」と感じた。自宅のある深谷市からみれば、車で通学する熊谷市はさまざまな人が集まる「都会」。衝撃は大きかった。

文通がはやっていた1年生のころ、友達の話で東ドイツの男性と知り合い、英語で文通を始めた。東西冷戦の象徴「ベルリンの壁」が崩壊するおよそ3年前だ。



県議88人のうち、女性は13人。「昨年は地元の深谷が渋沢栄一に沸いた」と江原

「東側には車とか全然ないんだ」「じゃあ、日本の車の雑誌を送るよ」。そんなやりとりを重ねた。ドイツへの興味は膨らむばかり。社会人を経験した後には大阪外国語大（現・大阪大）へ。ドイツの環境政策を地域に生かそうと、深谷市議から政治家人生を始めた。

県雇用労働局長の山野隆子（58、82年卒）は、母も祖母も姉も熊女出身。当たり前のように熊女に進んだ。外国の映画が好きで英語部（現英語劇部）に入り、部長を務めた。お気に入りの洋画は「エイリアン」。戦う強い女性が主人公だ。「ヒロインといえば、可愛いお姫様ばかりだったから、魅力的だった」。女性の就職を支援する「県女性キャリアセンター」（2008年開設）の立ち上げに関わった。



「働くお母さんのはしりだった」と山野。密着取材を受けて掲載された育児雑誌を大切に保管している